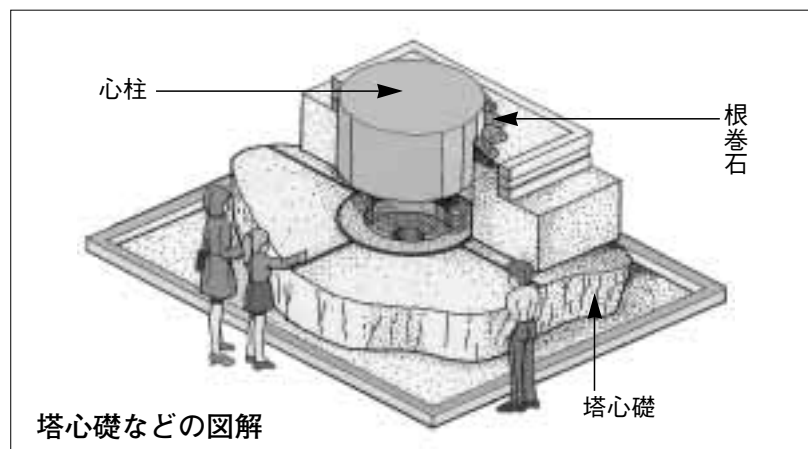
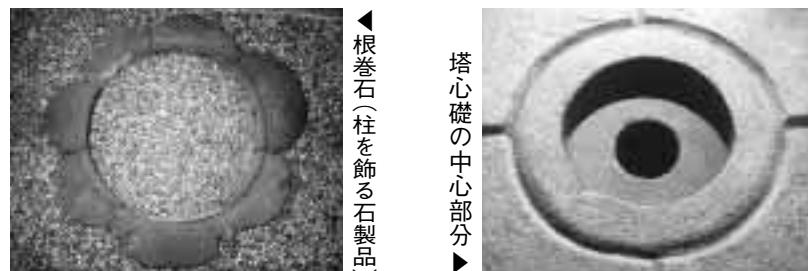


総社・元総社地区の古代遺跡 調査が進む山王廃寺

東日本を代表する荘厳な古代寺院「山王廃寺」があった古代上野国は、大和朝廷を支える大国として重要な役割を果たしていました。特に総社・元総社地区はその中心地であり、古墳時代終末期から飛鳥・白鳳文化、律令期に至るまでの重要な遺跡が集中しています。今回は、本年度から5カ年かけて調査・研究が進められる「山王廃寺」について、文化財保護課で話をお聞きしました(担当は市民編集委員・杉山、石原)。
問い合わせは文化財保護課☎ 231-9531へ。



偶然発見された塔心礎から調査始まる

昭和3年「国指定史跡」に

山王廃寺からは歴史的価値の高い文化財が数多く発見され、白鳳文化を知る上で、とても意義深い古代遺跡といえます。大正時代の初頭、偶然に発見された塔心礎(塔の中心礎石)によって、その寺(昭和五十六年の調査で放光寺と判明)の存在が明らかになりました。

その後、昭和三年、「山王塔址」として、国の史跡に指定。創建は七世紀後半と考えられ、今日までに塔と金堂の基礎が東西に並んでいたことが分かっています。

また、そこから五十メートル北の場所で講堂の基礎と思われる

遺構が発見。奈良県にある法起寺と同じ配置です。塔、金堂、講堂の跡が発見されていますが、特に、塔基礎の北側は瓦で化粧した部分が確認されています。

古墳文化が終末期を迎える七世紀後半、総社地区には次々と大型の方墳が造られました。高度な石材加工技術で作られた石室には、仏教文化の影響も見られます。これと同じ技術で、山王廃寺の塔心礎や根巻石、鴟尾などの石製品が作られました。大陸から伝えられたこうした先進文化が、この東国の地でも華開いていたようです。

瓦・土器・金属製品などが出土
法隆寺に匹敵する塑像群も

石製品以外にも、瓦、土器、金属製品、塑像片などさまざまな文化財が出土しています。塑像とは土を主な材料とした仏像で、焼かずに作った物です。塑像の技術は仏教美術とともにガンダーラから中央アジア、朝鮮半島を経て日本に伝わってきました。ここで出土した塑像の水準は高く、同時期に畿内で製作された物と

比べて、遺跡からは「放光寺」「方光」と記された文字瓦が出土。七世紀後半から十一世紀初めくらいまで、寺は存続したようです。この間に何度も補修された形跡があり、国分寺に準ずる格式の高い寺でした。

古代国家の形成を知るためにも

貴重な文化遺産を次世代へ

古代上野国は大和朝廷を支える大国として、重要な役割を果たしていました。そのため、古墳時代末期から飛鳥・白鳳文化が繁栄した時期にかけて、国府のあった総社・元総社地区周辺に多くの遺跡が残っているのです。

この地で勢力を広げ、上野の地域全体にも影響力を持つ豪族たちが古墳を造り、立派な寺院を建てたと考えられています。山王廃寺にかかわる文化財が高度な技術による物ばかりであるのは、格式の高いこの寺に中央政府の意図のもとに優秀な人材がたくさん送り込まれたという証しです。

また、貴重な遺跡の保存・活用が大切。長期的な展望で組織的に取り組み、次世代へ引き継いでいく方策を講じなければいけません。それには、地元の方々の理解と協力が必要です。みんなで認識を深めることが大切ではないでしょうか。

